

琉球大学学術リポジトリ

学生主導型授業における教師の役割：
琉大ミュージカルでの主導学生ユニット「制作部」
と教員との連携を中心に：シリーズ論文1

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2021-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 服部, 洋一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48248

学生主導型授業における教師の役割

～琉大ミュージカルでの主導学生ユニット「制作部」と教員との連携を中心に～ シリーズ論文Ⅰ

服部 洋一*

Teacher's weight in the students' leading class
—Focusing the cooperation between the leading students and the teacher(s)
in the Producing Team of the Ryudai Musical—

Yoichi HATTORI*

はじめに

琉大ミュージカルの歴史と学生主導型 授業へのシフトの様相

琉大ミュージカル（以後RMと略記）は、筆者がその主たる責任教員として開講しているミュージカル関係科目群の総称である。それらの科目とは、共通教育科目「ステージスタッフ総合活動」、教育学部音楽教育専修専門科目「総合舞台芸術演習」「民族と音楽Ⅰ～Ⅲ」そして生涯教育課程心理臨床科学コース専門科目「音楽と言語」の6科目であり、共通科目は前期毎週木曜6限に、その他の専門科目は合併授業として毎週木曜日の5限に開講されていた。心理臨床科学コースは、平成28年度の教育学部改組による生涯教育課程の廃止に伴い廃止となった。なお、2020年度（令和2年度）は日本においても、同年1月より既に、同年4～6月が新型コロナウイルス感染拡大の第1波が来るとの予測があったため、3月の時点で急遽、同年度後期開講に振替えたのだった。折しも、その前年2019年10月に立ち上げた制作部2020に学生の参加数が乏しく、2020年1月初頭に一旦これを解散、筆者がかつてのRM経験者たちに再度呼びかけ、新制作部再建を図ろうとしている時であった。この前代未聞の「制作部への学生の集まらなさ」を原因とする制作部解散は、学生ミュージカルの卒業公演・自主公演の準備と公演時期が重な

り、これにより勢力分散が起こってしまったこともその誘因の一つとみている。

RMを経験してミュージカルの面白さ、ミュージカルの魅力の虜になるのはよいが、母屋であるRMの次年度への準備ユニットの活動が危ういものとなるという現象は、RMの22年間の歴史の中で初めて起こったことである。かつての琉大生たちも、この似たような年度末の時期に卒業公演や自主公演（これらは筆者の自主ゼミ「服部舞台表現ゼミ」の発表公演として位置付けている）を行ってきたが、それらの出演者・スタッフの中には、次年度の新制作部を兼任しながらも全てに手を抜かず、バリバリ精力的に動く学生たちの存在があったのだが…。時代の移り変わりとも言えようか、学生にバイタリティーが不足してきたのでは無ければよいのだが、今回のようなことが、2020年度末にかけても再び起こることがないように、何らかの手を打たなければならないと筆者は考えている。

さて、一旦は解散した新制作部であったが、RM経験者からも新制作部の再建を！との、自主的な声が上がりに、またRM存亡の危機を感じたRM出身で特に社会に出たのち、ステージ・パフォーマーや教員をしているOB/OGたちからも「自分たちに何かできることがあれば進んで手を貸します！」「RMの灯を消さないでください！」との有難い声援もあり、現役とOB/OGの再始動

* 琉球大学教育学部音楽教育専修（声楽）教授

意志が合金のように融合して、忽ちの間に20人弱の、人数的にも例年規模の学生が集い来たり、ここにRM新新制作部2020が立ち上がったのである。

新新制作部は、1月から2月にかけて数回の制作部会議を対面式で行ったが、琉球大学の対新型コロナウイルス危機管理レベルが引きあがってきたため、三密を避け学生たちと教員の健康を守るため、校内での対面会議を全面中止とし、オンラインによるリモート会議を続けることとなった。現在後期授業開始を目の前にした2020年9月末に至って、ようやく警戒レベル2での、新型コロナウイルス感染拡大防止対策を綿密に立てたうえでの対面授業が、大学と学部によって許可されるという状況を迎えている。その間、新新制作部は結成以来、新演目の決定、制作部役職の決定、台本の手配と補足作成、演出・脚色案の作成、オーケストラ伴奏計画、ダンスのコレオグラフィー考案、年間スケジュールの決定、使用施設の借用申請、広報の準備と配信開始、制作部広告取りの計画案立て、コロナ禍における「新しい演習授業様式」の考案等に取り組んできた。もちろん、例年行っている初回授業へ向けての授業の宣伝をかねたフラッシュ・モブのコレオグラフとダンス練習、受講生募集チラシの作成と安全なプロパガンダ計画（コロナ禍においては、ピラ・チラシの手渡しでさえ差し控える必要がある）に取り組んできた。

RM制作部の学生たちは今回の人類が初めて遭遇したコロナ禍の脅威下においても、RMという総合舞台芸術的異年齢集団活動を通して身につけてきた、様々な人間力と生きる力、すなわち問題発見力と協働性を保持した問題解決力、情報収集力とコミュニケーション能力、社会性、予測力・展望性等々を遺憾なく発揮してくれている。

筆者は、琉球大学の教員として27年目を迎え、今年度が本学在職最後の年となった。RMという授業においては、その間、平成29年度及び30年度と、2年連続して琉球大学の「プロフェッサー・オブ・ザ・イヤー」（以下POYと略称）を拝受した。POYは、学生による授業評価アンケート項目のうち、特に「この科目を他の学生にも受講を勧めたいと感ずるか」の項目で非常に高い評価があったとされる科目の担当教員（全学で約10名）に与

えられるものである。上述のように次期開講のための準備を綿密に行い、授業開始後は新しい受講生たちをリードしていく制作部学生たちがまず存在し、そしてこれに呼応しつつ成長を重ねていく新受講生たちこそが、この授業の主役なのであるから、琉大のPOYは、筆者や筆者をサポートしてくださる協力教員へ与えられたものというよりは、主導学生をはじめとする、この授業を作り上げていった受講生全員に与えられたもの、その代表として筆者や協力教員が拝受したものであるととらえている。

こういった学生が主体となり、学生が自己を磨きつつ、他の学生に教えるという学生主導型授業のあり方を、まずはその準備期間から新受講生を迎えるまでや、新受講生を迎えたのち授業成果発表会を遂行するまでといった経時的配列で、教師はどのように関わっているのか、学生の人的成長を第一に考えるならばどのようにかわるべきかについて順を追って述べていきたい。

1. 新制作部立ち上げ～主導型学生ユニットの持つ教育的意義

例えば2019年度RMは演目として“Chitty Chitty Bang Bang th Musical”を取り上げた。これは、2019年7月7日（日）に学内発表公演を琉大第1体育館で行い、8月4日（日）に沖縄市民会館で開催した。この最終発表を終えると、その週の木曜日（RMの授業日）に「戦後処理会」という名の2019年度としての最終授業を行うわけである。ここでは、キャスト同士で衣装を貸し借りしたものを元の所有者に返却したり、当日の観客からのアンケートには記載されなかった、様々の反響を報告しあう「勝利の報告会」（もちろん至らぬ点についての厳しい指摘なども、次年度の課題、改善点として自由に発言される。

そして、イベントとして「琉大ミュージカル殿堂入り受賞式」が行われ、RMを4年間連続で受講した学生に賞状が手渡される。RMのみ4回受講者は、＜殿堂「栄光賞」＞、英語劇ミュージカル（以下EPM）と合わせて計4回となった者には＜亜殿堂「金褒賞」＞が、大学院を合わせて6回以上ならば＜超殿堂＞、服部舞台表現ゼミの自主公演や卒業公演など併せて12回以上の学生

ミュージカルにかかわった者にはく過参加殿堂「舞台芸術活動貢献賞」の賞状が手渡される。筆者による文面の読み上げが終わると、受賞者のスピーチへと続き、4年間の青春の思い出を語りながら涙する者、その様子に笑い泣きを見せる他の受講生たちの姿、ととてもアットホームな時を受講生全体で共有することとなる。

賞状の文面は代表教員である筆者によるもので、各々の受賞学生に対して別々のものとなっている。名前だけ呼び上げて「以下同文」というような通常の授賞式とは異なり、文面には、受賞対象者が、第1年目から関わってきた作品と、その中で行った役職や活躍の様子・エピソード等々を、多少のユーモアを交えつつ鏤めた文面となっている。年度によっては受賞者数が10名以上にもなることもあり、筆者は最終公演が2週間後に近づいてくるころから賞状の文面を考案しはじめ、この最終授業に間に合わせている。

さて本題はこの後である。この最終授業が午後6時ごろに終わったのち、1時間ほどの夕食休憩をはさんで、場所を移して「新制作部の立ち上げ式」をおこなう。その年度に初めてRMを体験した学生が、次回は自ら作品を決め、制作部員となって、まずは次年度の受講生を向かい入れるまでの下地作りを行うためには、この最終授業終了と同時に次のプロジェクトへと進むことにしている。まさに鉄は熱いうちに叩きの格言通り、大作品の上演をし終わって感動ひとしきりのさなかに、間髪おかずに、次への始動に取り掛かるのである。

1.1 次年度演目決定までのプロセス(著作権借用可能性の打診)

新制作部立ち上げ式だけは責任教員が主導して立ち上げるしかない。最終授業をやり終えたところで、旧制作部はその職務を終え、事実上の解散となり、ここに主導学生の存在しない一瞬の空洞が生じてしまうからである。この「前編の終わりは後編の始まり」というスムーズな移行がとても重要であると筆者はみている。

その立ち上げ式には今度は通常20~30人ほどのRM経験学生が馳せ参じてくる。ある者は「今度は自分が制作部として次のRM作品を創り上げていくぞ!」とすでに腹を決めてくる者、「次の制

作部ってどんな人が集まってるのだろう?」「顔ぶれと様子を見て決めようかな」という不確かな気持ちと興味を持って集まってくる者、「さて、自分は次は4年次だけど、どうしたものかな。就活も卒論もあるけれど、でもRMやり続けたいな」と自己の将来と天秤をかけながら集まる者、「4年生で琉大最後のRMだったけれど、この後を継いでくれる後輩ってどんな顔ぶれなんだろう?」という親心めいた気持ちで覗きに来る者、とその気持ちは様々である。

さて、筆者はここでいきなりこう呼びかける「ジュピター諸君、ようこそ新制作部立ち上げ式へ!」そして、筆者の総合舞台芸術的異年齢集団活動の意図する人間教育的目論見をこう語りかけるようにしている。

—今年度の作品で初めてRMを経験した学生諸君は、大きな作品をみんなで力を合わせてやり遂げたことをきくと感動をもって受け止めていることと思います。実は、この授業というのは、ミュージカルの練習と公演を通しての人間教育の一環として、私は皆さんに提供しているものなのです。実は人間教育の成長段階にはいくつかのレベルがあります。その第1は「歓喜の享受者となること」。今回ミュージカルをやり遂げて達成感を得た、本番の幕が下りた時、感動の涙が止まらず、仲間たちと抱き合って泣きながら互いの健闘を称えあつた、RMを始める前はあんな自分だったけれどこの集団活動を通して、こんな自分になれた! その成長の手ごたえ、その何物にも代えがたい歓喜を享受すること、これがまずは大切なことなのです。そして、人間的成長はここでは終わらない。次なる成長は、そういった自分が生命で感じた、魂が打ち震えるような感動と歓喜を他の人にも味わってもらいたいと願い、その感動の波を幾重にも広げ、創り上げていく人になろうとすることが人間的成長の第2段階なのです。他の人が感動・歓喜するのを見て、これをわが感動と歓喜に感ずることができること、これはとりもなおさず教育における「教師の境涯」とも言えるのですが、これを「歓喜の提供者」と私は呼んでいます。制作部員は、こ

の歓喜の提供者となるための訓練でもあるわけです。ことわざにも「菊づくり菊観るときは陰の人」というように、他者の歓喜をわが歓喜として受け止めることができる境涯を身に着けるために、どうです、次年度作品を創り上げていく制作部員となろうではありませんか？

そして、今後迎える夏季休業を新制作部員としてどのような準備期間として過ごすかの手順説明を行うのである。それは、まずは作品研究をすること—ブロードウェイもしくはロンドン・ミュージカルにはどんな作品があるのか、これらをビデオを借りてじっくり鑑賞したり、YouTubeで観たり、その筋や規模、オーケストラ編成等がRMの次期作品として適切なものであるかどうか、これを研究し、それぞれが1作品ずつ、推薦作品を決め、筆者に報告を入れる。筆者は、海外の著作権会社と交渉し、それが現在、アマチュア団体に上演権を貸し与えてくれるかどうか、台本やオーケストラセットを借り受けるのにいくらかかるのか、1公演ごとにいくらの著作権使用料がかかるのか、練習用の参考音源はあるのか、などなどを英文メールでやり取りをしていく。夏休みが明けたら、一人1作品のプレゼンテーションを行い、全員で討議しながら次回上演作品を決定していく。作品が決まっていくプロセスで、制作部内の役職も決定していき、作品が決定了ら、これと筆者が契約を結び、海外の著作権会社から資料を取り寄せる、という初期の作業工程を学生に伝えるのである。

1.1.1 海外の著作権会社と取扱い作品

制作部学生たちは、8～9月の夏季休業間にYouTube等を検索しては、様々な作品研究を始める。また筆者が紹介する代表的ブロードウェイ及びロンドン・ミュージカル作品の著作権保有会社等の取扱い作品を検索して、そのあらすじや、メイン、サブメインキャラクター数、コーラス構成数、オーケストラ編成等々、すなわち「作品の規模」をチェックして、興味が沸いたものを絞り込む。そしてそれらについて、筆者に、RMで上演することができるか否か、著作権の借り受けが

できるか否かを調べてほしいという依頼のメールが続々と送られてくる。それらを会社別にまとめて、筆者は、その著作権保有会社のアジア地域担当のエージェントに英文でメールを送り、上演の可否を仰ぐのである。代表的な会社のエージェンシーと筆者は、長年のメールのやり取りで知り合いとなっており、本来ならばそれぞれの会社の指定する書式に打ち込んだものを添付で送り検討をしてもらうところを、個人的なメールで、情報待ちができる状況にある。(以下にこれらの著作権保有会社のうち代表的なものを掲げる。略号 - 正式名称 - HPのURL - RMがかつて手がけた作品名(上演年度)の順で記述してある。()内は内部及び外部発表公演を行った年度、本論末に各社のURLを記載。)

MTI: Music Theatre International

Westside Story (2005) /Singin' in the Rain (2006) /Scrooge, the stringest Man in Town - Christmas Carol (2007) /Highschool Musical (2008) /Little Shop of Horrors (2009) / Big the Musical (2010)/Into the Woods (2011)/Thoroughly Modern Millie (2012) /
Our House (2013)/How to succeed in Business without any Trying (2014) /
Made in Dagenham (2016)/Catch me if you can (2017) / Singin' in the Rain (2018) /
Chitty Chitty Bang Bang (2019)

TRW: Theatre Rights Worldwide

Big Fish (2015)

TAMS: TAMS WITMARK LIBRARY

Chorus Lineコーラスライン (2004)

R&H: Rodger and Hammerstein

Footloose (2020, 予定)

LW: Lloyd Webber

ちなみにLloyd Webber 社とは、“Joseph and his Technicolour Dreamcoat” が上演候補の一

つに上がった年に連絡を取り合っている。この会社は、邦語訳上演の計画を申請した際に、どのような日本語訳になるのか審査するために、任意の1曲に邦語訳歌詞をつけて楽譜を返送せよという指示がきたので、筆者が邦語歌詞をつけたものを送ったところ、すぐに著作権使用許諾を得ることができたのだった。

また、制作部の学生たちには、上記のほかにもMusical101.com (Stage Musical Rights Index - USA) も紹介し、ここに上記の会社以外で、ミュージカル作品の著作権を保有している会社があり、そのHPに飛ぶと、YouTubeでは見られない、様々な公式PVやミュージック・ナンバーの視聴ができ、その作品に関する周辺情報も得ることができることを報せ、積極的に調査をして、後期開始すぐにも、一人必ず1作品のプレゼンテーションができるよう準備するよう伝えることにしている。

MTI (Music Theatre International)

<https://www.mtishows.com/>

TRW (Theatrical Rights Worldwide)

<https://www.theatricalrights.com/>

次の著作権取扱会社は、現在Concord社のCollectionとしてまとめられている。

The Andrew Lloyd Webber Collection / The Rodger and Hammerstein Collection / Samuel French / TAMS-WITMARK LIBRARY Collection

<https://www.concordtheatricals.com/>

なお、R&H(Rodger and Hammerstein社)とは日本では、東宝ミュージックが代理代行を行っており、琉大ミュージカル2020Footlooseは、直接的には東宝ミュージック社と著作権使用契約、及びペルーザル(台本・歌唱用楽譜セット)・オーケストラ・パート楽譜資料等借用契約を行った。

(シリーズ論文Ⅱに続く)